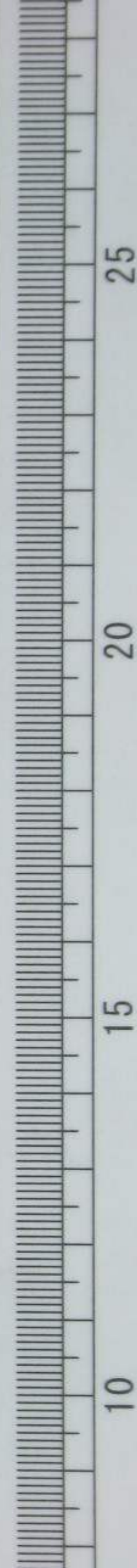




柳田文庫
文庫11
A 97





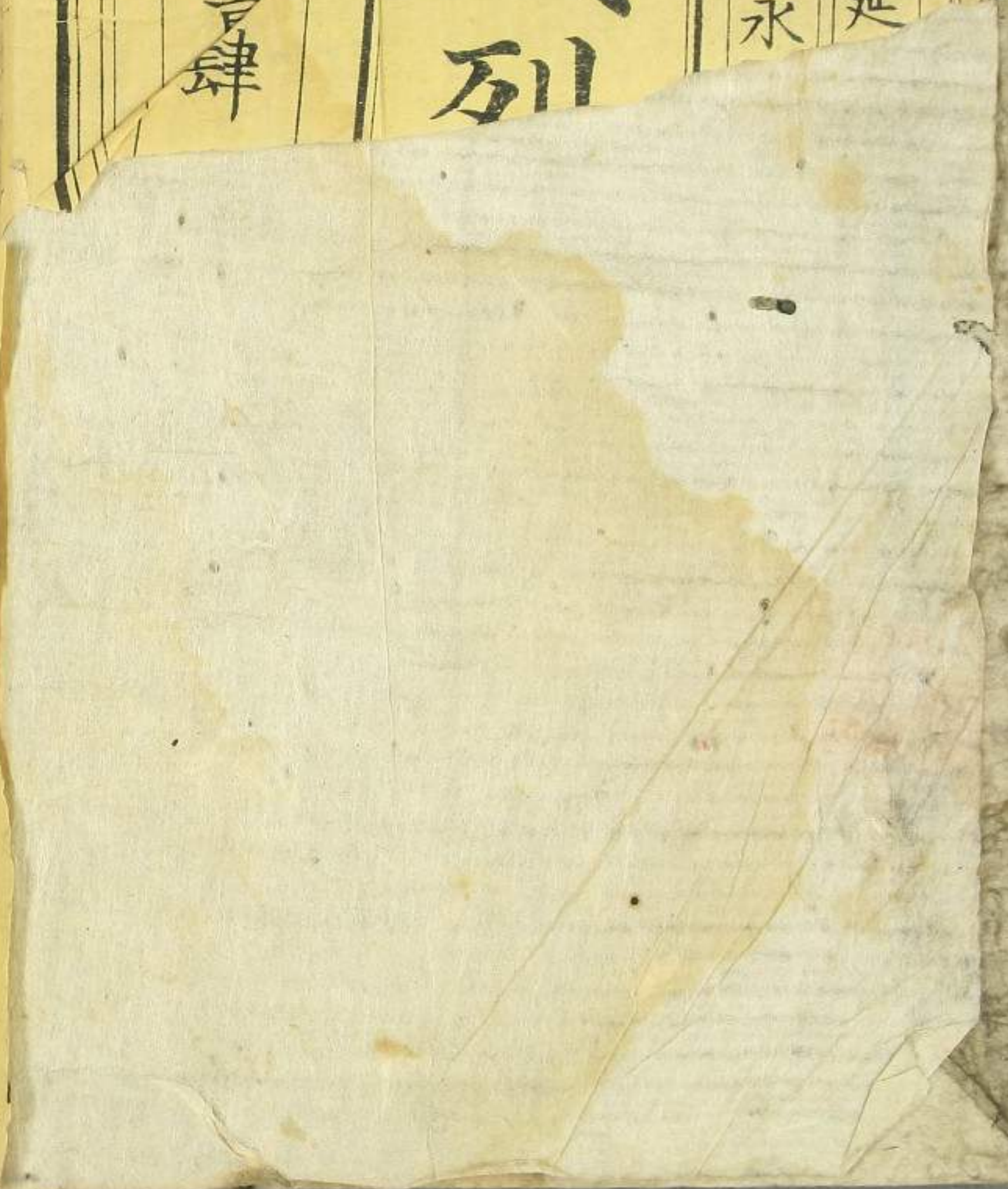
結 郷 國 香



東京書肆

義 列

鮮齋永
漆崎延



御製

けきふゆふの
 民安くれ
 おかふゆ
 おかふゆ
 異とゆの
 長門ふゆ
 詠とまふ
 大君とゆふ
 つゆとゆふ
 見れバ



高天の原よ

毛鹿あはたふ

藤原實美公

参 朝之節

詠とられたる

歌

あはたふ

あはたふ

あはたふ

あはたふ

あはたふ

徳川家茂公



黄門定家卿小倉の山荘に百首と選りけりて摸擬し百人一首と題せし
 冊子往々數種ありて又之を兒戲の玩具のみ適書肆其多者来りて癸丑
 以降の英傑の詠歌を集めりて彼躬裁し做してと請ふ最も歌と撰ふ事
 輒々ざる所為なれと諸史及び口碑に傳ふる吟詠甚々ざるは一首と一
 報國の志を舒ぎるは罕なり是を稚童の手よりなれと常に誦誦為ん
 べし自りて忠孝節義を勸むる端も成りふんと茲に一百名を集
 り尚齧頭と小傳を加ふ亦ども楮上狭りれば其全傳を挙るを得
 ず且見過ち所僻めたる粗漏もなるとまてくは看官僕が誤脱を
 咎め幸ひに投書りて忽ち改正まてくよとせん

明治七年七月穀旦

染崎延房誌書


烈公の水戸の藩主めて諱は
 齊昭從三位中納言たりその
 性質英明ある故做をことり
 皆意表し出れば幕府或は
 異志ありと疑ひ是を駁込の
 師に幽せ後粟米利加船渡来
 せしより再び國事は関りあ
 と公の英断を用ゆるもの
 りく遂に彦根中將のため
 日本国水戸に幽閉せられ
 享年六十三と卒は
 詔して大納言致贈らる



義烈百首

孝明天皇の皇妹は
 親子内親王と称せ
 御歳十六にて関東
 入輿せられ大樹家茂
 公に嫁しあふ這は是
 公武御一和茂名と
 幕吏の計るごと
 る人或ハ批判せし
 此宮ゆくり貞節
 在りて斯のてくの
 御詠り



和宮
 君と
 民
 と
 の
 武苑
 清也

通称張源次郎と
 喚われ若州の産
 あり後移りて京師
 住は博く和漢の書
 通ト兼て蘭学を
 李びと詩文和歌
 達せしが安政五年
 の秋幕府の疑ひ
 受けて縛せられ小倉
 侯に預けられて遂に囚
 の裡に没せり



梅田定明
 君の代張
 心
 我
 心
 心

義烈百首

藤田名ハ彪水府の臣
 あり當初烈公藤田等
 命よ普く領中の
 梵鐘を鑄潰し大砲を
 造らば水戸の奸黨
 とれを沮え烈公とゆり
 ともよ藤田も一田幽せり
 且一再び国政を執るふ
 至り彼の水藩も正義
 派とりよ者東湖とあり
 嗚矢とせり



登幾女ハ水戸の人みて
 烈公の侍婢ありその
 志操雄々しく世の
 形勢を慷慨とあや大
 丈夫よ愧づべしを適
 烈公の密旨を受け
 窺りふ九重の裡に至り
 奏さる所ありつるも
 幕吏の為よ妨らば
 其事画餅よありしを
 遂よ双よ伏したりとぞ



蓮田ハ水藩まで彼の櫻
 田の義黨十八士の一人多
 事果て後肥後彦は囚
 せらる此人至孝ふしと幽
 中一母を思ふの歌三首
 り其一を挙ぐ
 けられり昼の望のまおもむ
 狗よたぐせぬ母れおの
 警固の人ささう一技さ
 に見せしるべ
 守る人憐れなくば此妻ハ
 たりね櫻もつふ御めん

蓮田市五郎
 降り
 花の
 雪の
 仰が
 妻の
 月

佐野も同藩まで烈公の
 小姓たり櫻田の一番小彦
 根藩小西某等と血戦して
 敵を斬り其身も重傷と
 被りしうど些とも屈まる
 気色なく閣老膝坂侯へ
 自訴みしと彼藩士より
 尋問のかわら弁古狂ハ
 返答せしが辞終ると其
 終り容も崩さば死し
 たりとぞ

佐野竹之助
 櫻田
 花
 雪
 仰
 妻
 月

義典百首

ありむら 薩藩にて水戸
 の藩 鶉飼 幸吉 一 所縁
 のり 幸吉 去る 戊午の
 秋 罪多く 刑せらるる 一 旅
 憤り 櫻田の 拳 一 かり
 る 数ヶ所 所の 深癢を 負
 ひ 一 あり 然れども 敵の
 首を得 一 ぐ 自ら 是
 を引提 一 辰の 口を 割
 退き 一 ぐ 爰より 割
 腹 せし と あり



ありむら 雄輔 治右衛門 弟
 り 一 俱 一 薩藩 あり
 櫻田の 拳 一 かり んと
 せ 一 治右衛門 固く 押
 禁め 兄を 義 一 よろこ
 茲に 死を 一 汝の 忠を 尽
 せし り 一 雄輔 是非 多く
 江戸を 去て 姑く 伏見 一
 匿し 居たり 幕吏の 探
 索 一 ぎ び 一 され 遂 一 自
 殺 一 及 び 一 あり



森々實名を行宗と
又水戸烈公は仕へて
馬廻りたり勇氣衆ふ
超たるのりり武術は
長一者たりれば桜田の
一舉ふも第一番は破て
入り衛士許多を相手は
せしりと其身は薄瘻
ゆゑも負はる後肥後
郎は自訴ありて義士等
同時は死し就けり



森々郎
たびふ
月さ
あり
うふ思ふやと

島氏も元水府の藩
士なり故ゆりて本國
を去り攝津の国浪花
の生玉は住し撃劔を
のりて一時大いなる名振
夷りせり然るも櫻田
後脱したる高橋某
等甲乙の有志を匿ひ
たる吏ありは忽ち獄
に下されしは幾程もな
く病て死しり



島男也
大丈夫が
物おのひ
志賀はうら浪

飯田を周防の産るる
 有栖川家の臣あり此人
 博識多才ある諸子百家の
 書ハつゝもさらりあり野史
 小説もあはれ著す所
 の書數百卷あり然る戊午
 の變ふ方り幕疑と受け
 獄より下り姑くはつゝ赦さ
 らるゝ又桜田の疑ひを搦め
 捕らんとするや憤懣は堪
 へず自殺せり



飯田左馬
 君の代は
 免の
 美と
 多
 朝日の
 長閑なる

通称を寅次郎とて長州
 の藩より始め粟米利加渡
 来のとて洋行をせんとし
 て事ありを姑く本藩よ
 幽せられたる後き間部閣
 老が有志の輩と捕ゆるは
 憂ひを暗殺せんと計り幕
 吏さふ知らざりて余事を以
 る渠と縛を松陰余事と悉
 く辨解し却つて暗殺の事
 をいふ幕吏をいやく刑せ
 し又惜むべきの英俊あり



若田松陰
 斯くをれ
 からなる
 知るが
 出る
 優だま

胤康ハ北條氏あしこ
 武州豊島郡に生る六才の
 とた家を出て終日向の慈
 眼寺の住ま奇才あり好ん
 て兵法を講び嘉永七年岡
 候の宿老及び藩士に説て
 大挙を因らん夏を約し又
 延岡の藩士とも鼓舞せん
 とて事ありしむ却て其
 藩は囚われて後まて京
 師へ引籠りしむ



僧胤康
 教如ら然
 何れ
 君のた免
 けらば誠名
 多ゆ海に其の死

吉村ハ土州の産ありて
 勇剛の士あり大和の
 義黨の總裁とありて
 高取の城攻めたる敵の
 弾丸飛来りて腹より腹へ
 打抜りしうど聊も屈ま
 る色なく函師に治療を
 させたり傍ら軍事を
 論談せり南山遂に敗る
 り至りて就鳥家村にて自
 殺せしと言ふ



吉村寅左郎
 累りたる奇
 月城を
 おのふ
 聖なる
 ついでに
 今よ怒ふやと

忠光卿ハ専ら報國の
 義氣ありや久し京師
 を脱し長州入りし
 異船掃攘の事は関り
 後ま天忠組の主將と仰
 ぐれ一時大和に威を
 めされし朝議一変
 むせし幕府の討手
 又通らざる再び長州へ
 落行りれ遂にかの地
 卒せらるる



通稱を津之助と
 備前岡山の産あり此
 人書画を能し且兵学よ
 通まりが又大和の義舉
 のうちふ於る三總裁の
 随一して天の川は楯
 箒り志をく奇計とめら
 して数日寄手と悩ませ
 しが勢ひ究まる時に至り
 紀州勢と血戦し討死を
 せん遂しと



松本を三州葎屋の人
 ろく書を能くし詩
 文章を巧み此人
 生れつる片目ありと又
 ども國事は着眼を以
 るら双眼の者より明
 ろく姑く諸國を遊歴
 る一後南山の義徒は加
 らりまゝ總裁の一人と
 吉村寅太郎と同日に
 戦死す



弥四郎ハ松本と同郷の
 人多り勇氣のりとも熾
 んりて人より後多し事を
 耻と一假令火の中水の
 底とて飛入るとせ更
 厭をばされば大和の美
 よ加たり戦ふとみりつと
 るも魁せざるといふ更
 む一既よ十津川の本營
 破れ敵八方より圍むと
 斬死をせんせと言ふ



義川百首

百

安積を江戸の人々
中山卿よあつひひ
大和の一番の謀主た
り此人膽勇秀才ありて
常藤本鐵石と謀り
奇計妖りの敵を撃
つ事少く楠公の
風流とを衆軍敗散
せしふ至り勢ひ究ま
る縛せし後京師を
死し就けり

岡見を水府の藩士あ
り外國人の跋扈あ
は募る後見る忍び
を去る文久二年の夏同
志数輩とのあつひ東
禅寺の旅館を襲へど
利つづいし遁れ去り
所々匿れて居たりしが
後南山の義舉よ加えり
屢寄手と悩せしあど毛
遂に擒よせしれり



通称を六郎といひ撰嘉伊
丹の人を始り僧侶たりし
後還俗して班鳩御所の御
内人たり國風をよく詠吟
ありあり後より大和の義
挙に加る時は十津川の本營
へ戦来りぬといふより六郎
も鎗押取りて馳出さんとあ
りふ折しも九月節向まれ
バ谷間の菊を手折りつ差
挿まるとかゝる詠なる

野崎を和州十津川の
郷士といふ頗る忠肝
あり南山の義黨を
よよはえたる多く土人
は鼓舞して中山御
よ従がひしを其手
の隊長とせらるし
既に敗潰るまよ及
びて衆の命を助けん
たえよ其身は屠腹
あつりといふ

伴林
光平
化紙
折る
奈史史毛
かざ
菊ハ折



折るのちよ
奈史史毛
かざ
菊ハ折

野崎主針
大君平
はの
まの
我守り
おのそ
おのそ



野崎主針
大君平
はの
まの
我守り
おのそ
おのそ

安岡を上州乃産よ
 一と忠憤の心も
 とも深く外國船渡
 来せしと全國に害
 何るにまは患ひ思
 愛の妻子を棄て本
 國脱し同志の
 輩と交わり遂に南
 山の舉よ加らうしが
 戦ひ敗れ縛せ
 らとぬ



荒巻を又留米乃藩
 あり響し筑前の平野
 次郎のめを九州を
 周旋し同志の者と
 集むると同藩八九名
 と俱に國を脱し伏見の
 一挙に列ありしが其莫
 遂に調を後まて大
 和の義舉に加らう師
 潰ゆる時は方りて寄手
 一搦捕れたる



洪谷より下館の藩士に
一と江戸の人あり剛
氣猛烈衆よ超たり南
山の義拳のたる単騎
敵陣に使い事の
情實を辨解せしむる
藤堂家の建言せられて
鎮撫なさんと為たれども
其事用ひられざる故
伊与作も又縛せしむる
志と俱に刑せらる



洪谷伊与作
枯柳の
消ぬ
魂を
有明沙月

吉田と筑前の藩より
本名を田中重次郎と
の懐慨のゆえに國を
脱走し後大和一挙
に與て十津川の本營
敗るる及び紀州乃
隊と戦ひしが勢い
窮まりる虜とせし
是洛に至るる刑よ
就く



吾田重藏
八幡神皇國
何れと
肉外の
はるひたも人

乾を和州五條村の因
生あり中山御以下同
所は縣令鈴木某致
誅し十津川は楯籠れ
るまを有志と謀計
合せて大いふ周旋し
たりしが戦ひ終り
敗散のたは姑く浪花
は潜匿居たり坂市尹
の隊は捕へられ遂に京
師へ送りぬ

都石を相撲取りて都
不二吉右衛門の弟子
あり義徒森下儀之助
従ひて大和に到り既
帯川の二戦り大旗を
持て勳なり十津川敗
れて後浪花は趣ん
と鷲家討しし所
酒屋は憩ひ居たりし
彦根の兵込入りて遂
虜よせしとたり

乾十郎



以ての免
ち纏る
深ふ
赤死ゆる
なご愛海へき

都石吉三郎



海をうを
草野
名よ
咲出
屋の空梅子

本名善之助とて河州水谷村の豪農あり報國の志ありとも厚く大和の義挙起るのそと家産を尽しとこれが費用とて嫡子栄太郎もまたあの業は加りや父子赤心を伝へしやと其事終に成功し至らば敗れ及びて紀高の隊に捕へらる



喜遊ハ西師某の女と始り江戸吉原甲子屋の抱み子の日とて後横濱の岩亀樓へ住替とあり喜遊と改む其住替のとて異人の客み出るとハ決してまゝに昔と約せ然るふ米国の客屢喜遊は婿んとを望む家主も又約紙変じて出づべき旨を通るを辞して許し給ふを知らず一首を遺して白刃よ伏せり



橋口を薩州の藩ふ
勤王の志厚く専ら
諸州を周旋し之忽ち
有志數百名を募り伏
水驛に至り大挙し及
むんと図りし事の
艱難なる所より同藩
中より争論發生し同志
甲乙數輩とこのよ茲に
斬死したりといふ



橋口壯補
皇の御世を
苦み
返らん
思ふ
神も多し
死
人
甲斐
水

但州の産より中山家
の臣田中某の養子となり
正六位下河内介に叙任
せり此人國の危き疾患
ひ姑く西國を遊歴し
一又薩州に滞留して
かの橋口等と俱に図り
伏水驛に屯集せし
内乱生じ事ありば
再び薩州に至らんとせ
途中よおつて横死せり



田中河内介
大君の
御旗
死
人
甲斐
水

飯居ハ備前の脱士よ
一と伏水の一挙よ如
ちりたきと夏あつぎ
後も大和の事件よ
就きさをも大の周旋
あつりふ奈何あつ
仔細うけりみん元治
元年の春の頃あつ夜
四條河原よあいつ
あへなく闇殺せし
と一とを



天地の菊
服居簡平
驚れ
母小登ひん
極た國の里

仙石ハ因州の人あり同志
十余名と俱よ文久三年
二月廿二日洛西等持院
よ何の所の足利三將の
木像の首を斫り三條河
原よ肆一う這ハ足利の
強逆を悪とて此所為な
と忌諱よあつ所われ
ハ會津家其徒を捕へん
と隆明病中あつ自
殺し囚れを脱る



仙石隆明
何國の浦よ
あつむ
魂あつしん
九重に在

長尾ハ京師の市人ふて
 綿屋某ガ弟あり撃劍
 遠書を讀て常々懐
 慨の思ひふく足利の本
 首を伐り其徒は加ハ
 りたるより追兵の手は
 捕へらる然るは此奉囚
 きたるもの後諸侯は
 預けられし長尾をうり
 獄舎に殘れ翌年遂に
 死に就たり

長尾郊之郎
 君がたえ
 おと
 おの
 定め
 元々おのち
 其の救ふを



小川ハ久留米の藩より始
 め大和の義挙に與り既
 敗潰るまふ至りて幸ひ小脱
 去り待て甲子の兵乱に長州
 の隊よ加りて堺町に寄り
 引揚の後長州に到り寄兵
 隊のうらみ入り専ら防戦に
 力を尽し後まて伏見の戦
 争に徳川勢と戦いて弾丸に
 中り一服屈せしむ長尾は
 飯り疵の為に死せりとを

小川佐右
 外多のあひ
 かぞ
 年
 月
 我ふ
 のちの



長尾一節

平野ハ福岡の藩ありて報国の志厚く洛上登りて同盟を
集むる多しは幕吏に追
そる仍て山伏の姿とあり九州よ
忍び行て大の有志のめを
かゝる書を島津家よと
出して大挙と図らんと為たる
と元旧主のためよ幽せんと
て素志を遂るふのうらみ
後澤卿を説きあはく祖
嗣生野の事を挙げし
南山の義挙敗れし也
所もやぶまゝ縛せしる



月照を洛東音羽山清水
寺の住僧とて國を患ふ
るの志あり仍て平野と
同盟せしむる多しは幕吏に
縛せられんとは爰に於て
都を脱し平野とこのふ
船よ乗りて日向よ赴んと
まろよ潮悪くし船前
まざるし追兵頻りし逼
りし也脱れんとし思ひ
ん忽ち海よ身を沈めり



伊三次ハ薩州の藩あり
少年の頃故ありて国を去
り父某と俱よ水戸よ遊ぶ
水戸烈公渠が人とそりて
愛し祿を興へんとまれを
肯ぞん其心二君よ仕ゆを
厭へず如し烈公感ドと
薩侯よ告々侯仍て召還る
後戊午年の変よよんて
縛せられ遂よ牢中よ
おめと病よ死せり



月下部伊三次
少年の像
五月雨の
あたり
わらう
とん
知り
たのづら
照ふ日紙新る
ふ世活しき

頼氏ハ山陽の第三子
みろろ花洛加茂川の
邊りふ生る仍て鴨屋
と號を去の人博學
秀才みろろ別て詩
文章よ巧とある世人の
よく知る所あり戊午
年の変よ水府の事
よ関かり依以と疑
それ梅田源次郎等と
俱よ囚えとたり



頼三樹
乱れ嘆かのみ
花を振りし
海も
春も
茶の
生ひ志
げらふん

飯泉も幕臣曾我
氏の家来より一と因
業をたうせり嘉永年
間外國船渡来しと
國に害あるを憂ひ
尊攘の大義を明ふ
と其頃京師に登り
権貴の門に立入て種々
尽力及びびト遂に
幕府の疑ひを受け江
戸に於て刑せらる



鶺鴒も水府の藩
しと京都の留守居
役あり戊午の年同藩
安嶋帯刀等が攘夷
の勅書を乞へるを
は関係しと盡力せし
ふ彦根中將より探
探りて事の変より
よかよび同志等と俱に
縛めらる東武へ引れて
刑に就けり



小林を雁鳥司家の
 重臣より従五位
 下たり戊午の年彼
 の安島等あの人よ
 就きく水戸家へ
 勅書の下らん夏を
 乞ふ仍る幕府の
 疑ぐひを受けその罪
 遠流とまはゆりしよ
 遂に病て死せりとぞ

小林氏部大補
 松平の
 子
 のあれを
 かき金
 色よ
 笑くらん



豊島氏へ有柄川の
 宮家の臣みく
 五位下太宰少貳
 叙任せり既よ戊午の
 変に至り間部閣老
 京師より頻りに
 探索せりしうら
 まに疑をれそ一ト
 獄よ下され後赦免ハ
 在りしうと遂に疾
 と死せりとぞ

豊島泰盛
 はふくぐと
 見ゆる
 限り扱
 志免
 おた
 我の物
 おかほみ
 おふ野色くれ



平山を常州の産ふ
 一々外國人の跋扈と
 惡く嚮は幾内の地は
 つら事と奉んとも
 調へ髪を剃る姿
 をやのー関東より
 坂下の義挙は與
 安藤侍従を刺んと
 事ありき衛士数名
 と戦ふと遂は其場
 落命せり



児島ハ下野宇都宮
 の人ふ〜幼年の頃
 ハ水戸は遊學一藤田
 東湖等も季づりこの
 人慷慨の志気ありとも
 烈しく常に攘夷の論
 を發し其論逼れば
 必は泣く然るは坂下
 の挙は関せしを以て
 縛せしは遂は獄中
 へ殺せしを



蓮田を水府の藩
 あり幕吏 勅旨を
 奉ぜざしむ 苟めの
 安き紙偷と漸次
 異人と親む 憤り
 同藩堀江克之助 信
 田仁十郎等と計り
 墨使を刺んとし
 事露頭一三名とのふ
 縛り就けり 這をこれ
 安政四年の冬とぞ



蓮田藤藏

武藏野の

おれ
 だふ
 道多
 我のゆゑと
 きのぬれ道

山崎もきく水藩め
 慷慨の志気甚と厚く
 江戸居留の外國人を
 諸藩よ命ト警衛
 多きと取扱ひの懇
 過れば渠が跋扈増長
 まれ山崎等憤り同志
 五六名と俱に豫て異入館
 とせし所の品川東禅寺と
 襲ひし事あり びし
 縛せし時 文久五年あり



山崎信之介

世中の

忘れ
 花を
 泳めん

大石ハ土州の藩あり明治
元年二月中浣佛人泉州
界浦ありいまふ測量
ひまを憤り同藩箕浦某
等十余名と相議りこれと
斬んとする程必佛人があま
船より上りて逃去るとま
りし砲を放ちて二人を撃り
其事忌諱ふあまが故も同
所妙国寺に於て同士十一人
辞世を詠下り割腹せり



林田ハ京師の産ありて
縣令小坂某が臣あり
憂國の志氣烈したる
大政復古の時に至れど
尚洋人と親むを好まば
明治元年二月晦日外國の
公使等参 朝あまより
聞よ堪む同志の士と示
合せ斬んと図りて事あり
ま僅よ衛士を傷けり
其身も又屠腹せり



義烈百首

澤卿ハ主水正より専ら
 國事よ尽力せられし文
 久三年八月の変七卿諸も
 長州よ脱しその冬但州
 生野の義挙よ主將たり
 一が更ありて又長州へ到
 られしが慶應三年京師よ
 かへり大政一新のときよ
 方り九州の鎮撫総督
 兼長崎の
 裁判たり



三平ハ本名高橋勇次
 郎とて薩州の藩あり
 姑く長州よ遊べり時平
 野次郎よ旅宿を訪れ
 爰より但州の義挙を
 因り澤卿を説きしめ
 る俱よ此挙の謀主
 たりし生野の敗散
 ありし時播州木の
 谷村よあつて砲丸よ
 中りて死す



義州百首

戸原を筑前秋月の藩あり但馬の一挙よ加りつ同國妙見山よ楯籠り諸家の討手と引受んとせしふ是も心躬方と思ひつる土兵等俄う小叛きし衆も多敗散多き中よ節節を守りて勤しも屈せず同志十一名と俱よ此山よ於て割腹せり

戸原印播
 新太刀
 おき
 免て
 磨
 心ありて架



八郎ハ長州の藩士ふいと猛烈ある吏屬ひ少あり既よ生野の挙よ加り妙見山よ籠るよ及び農兵襲ひ来るを見て衆も討て出んとするを八郎ハかゝ禁めまざる渠等と戦ひて賤民の手も掛らんより死を快くするみ如くと戸原をたどめ介錯み後我とら首刎て死せり

南八郎
 おろれな
 梅毛様
 芳る
 らん
 魁
 危も房毛河



小三郎ハ元膳所の
藩あり中頃普化僧
とありと名を素行
と喚べり生野銀山の
縣廳を義黨等劫を
時より一と大のふ尽力
ありしころが事の粗
磨る所より遂に破れ
よりのりしる丹波路
よを擲めしるれ洛よ引
るを刑よ就けり

本多小三郎
此中の人々
何とぞ
石清水
さきの死あるを
神也知らん



横田多因州の産
あり其性のゆとも至
孝ありと慨世の心を
又厚く忠孝全から
ざるを知り父母よ辞
しと國を脱し同志の
者よ交りしが後銀山
の一番よ與し國よ
報んとして更なる
は終よ縛せられて刑
よ所せらる

横田友次郎
五月雨を降る
古里の
我の
ならぬも
心よふをせらん



伊藤を丹州柏原の藩あり故ありく國を去り撃劍の業をめて諸州を廻り後去らく但馬に止まり土人よ劍道を教授做せしガ澤卿の徴に應ト門弟十四五名と俱し生野の陣よ加えりし事破とく後擲められ獄中少く疾て死せり

木村を丹後の人あり生野の義挙よ與せしガ既し事を起しとく僅くふ七日をくりして忽ち破とよ及びるる只徒し乱臣賊子と言とんとも口惜く仍てあれらの弁解をさんと同盟大村辰之助大川藤藏のろとも必需く縛せしとく

義州百首

伊藤竜太郎

事なきを新る人の者

とむよ屋番まぬ今世の中



木村愛之助

乱とるぬふの

河

御世とたつらん



信海を洛東清水寺
成就院の僧侶より
かの月照の實弟あり
俱に慷慨の志気あつて
既よ安政五年の復
勅命より夷狄降伏
國家安穩を禱りし
よその事幕府の忌
諱よめれと忽ち獄よ
下さるしが翌年病と
牢中よ卒せり

西の海 僧信海



東の海 字と
かそれども
心名おおど
君が代の
き免

元女は福岡藩野村貞貫
の妻ふして頗る烈女あり
殊に和歌をよくさす夫
死しつ後都よ登り有
志の輩とあやして夫等
が難よ遇つと匿ふ然るふ
その藩内乱生じて元女も
姫島に流さるゝと義士等
到りて元女を奪ひ長州に伴ひ
行て厚く之を扶助せり実ふ
近世の女使といふべし

野村望東女

消毛せじ
せむぎ
煙ふふせた
世に傳ふの如



大次郎ハ長藩吉田松陰
 の甥あり憂國の義士等
 同盟して君側の奸徒茂
 鋤んと圖りし此奉の謀主
 古高頼母が召捕れと聞
 けりも同志等これを取返さん
 と元治元年六月六日三條橋の
 側あり池田屋との會合
 せし討手の兵士對ひ
 故大次郎等斫る出
 遂に討死ありしを



宮部を肥後の藩
 一々尊攘の志念
 の烈とも深く諸刃を
 遊歴し京師より
 大次郎等と盟約を
 むすびくかの池田屋
 集會を俱に戦
 ふる同時死せり下
 に出せし一首の歌を
 加茂の行幸を拝せし
 とた詠りしと云



河瀬某ハ元膳所乃
藩ありて文才あり慶
應元年丑の五月既
長州を征せんと將軍
進發の期より河瀬
同志數十名と長
洲の無辜と論ドその
曲直を明くせんとい
ふ却つて縛せられ
其妻某かゝるいふ
堪む遂に又伏しとぞ



益田ハ長州侯の重臣あり
嚮よ堺町御門の警衛を
免除せしむる君辱を
雪ぐんと衆を率ひて入
京せしむる策畧齟齬
ある所より利ありて
退陣せし後尾州家
總督として長州に對し
罪を問ふ仍る益田等
自殺して主家の難を
解るることを



佐久間も同藩あり其人とたり
なほ弱冠のとき水戸遊びて會沢氏の門に入り博く和漢の骨を通ぜり
彼の歎願の夏まつた福原又副て伏水も在り
京師の變動も坐し縛せしむ

安戸も又同藩の士あり性質簡約みし詞まろふく頗る長者の風あり
國史も涉り藩籍も精しく毛利軍記一部を著す
既京師變動のとき大用談役を命じられたる大坂の邸に在り
仍て忽ち縛せしめ遂に獄中と死せりとぞ

佐久間佐之助
今もはや
茶の空
茶も
秋の露と
清ゆく水も
茶もあつた



安戸左馬介
朝又も
物も
浮世も
見はてあらん



松島も長州藩も
 始め医を業とす
 此人まらぶる洋學よ
 達一航海の術ふ
 精一されども生得
 疎放うくとも繩墨を
 當るを復む文久三年
 下の関して異船撃攘
 ひも船將あつ功在
 甲子の變を
 死よ就けり

松島別藏
 君が免
 此は
 壺ある
 室の
 知家ら



大谷も對州の藩士
 あま實直めて學を
 好む諸子百家の昏よ
 通む然るよ元治元年
 の冬奸黨のため暴
 殺せらる此人豫て謠曲
 を妙ふま仍之最期よ
 臨むのた葵の上乃
 一曲を謡ひよ音聲
 常に勝りよ久聞人
 袂を潤やせよとぞ

大谷正道
 終ふゆ
 閑
 持る
 美
 家



公知卿ハ文久の初年ヨ
 リ朝威を挽回為ん
 事を深く盡力ハ
 其の就中成の秋三條
 公と諸ともハ関東下
 向せられよく君臣の大
 義を明らふハ大樹を
 一ハ上洛ハ至らハ
 あり及をれハ亥の
 五月廿日の夜暗殺ハ
 あひハ卒去せらる



あひのこころ
 掃山洛公知卿

吹返

海

神風紙

初ハ毛をあら

ふみせらるハ終ハ

頼徳卿ハの心を國
 事ハ尽力せられ既ハ
 攘夷御親征を仰せ
 出さしたる処文久三年
 八月十八日卒ハ朝議
 一變ハ洛中紛乱ハ
 及ビ一ハ七卿ハ終
 とも長州へ馳下向ハ
 及をれハ甲子四月
 十五日下の関ハ卒
 せらる



あきとらむ
 錦小路頼徳朝臣

たふたふと三年

洛中紛乱

あひハ

赤

関乃

夏の夜に死

来島ハ長州の藩より
 強勇無類の英傑
 り慨世の志気厚き
 ら主家の勅勘と憤り
 を起さんとせし
 を久坂等と鎮め
 居たるは既甲子の京
 乱に至り其身一隊の大將
 とあり會津の兵と撃戦
 らち薩兵来り援け
 故に砲丸の中りて死せり



来島亦多謝
 義海
 実と
 抄と
 なし
 あはる
 國の大將
 余はふんを

久坂も同藩の後通称を
 義助と喚べり累年尊攘の
 変よつたての尽力を衆
 より超し既甲子の奉
 至り今禁闕は逼らんと
 宜しうと禁むれども衆
 らる之を聞入れを仍て事の
 成るを知るのとゆへも術
 さふ諸軍を指揮し攻
 入り師敗る時より
 り遂に割腹あがり



久坂金瑞
 時鳥
 有明
 月
 知る人

原々久留米の藩ふり
 尊攘の吏主張一と
 國を脱し既又文久二年
 久伏水の義黨よ加えり
 た甲子が甲子の挙めを
 長藩よ與一堺町口よ
 かい寄り頻りよ血戦よ
 及び一又遠よ重傷を
 被りて屠腹せり下よ出ど
 せる一詠の家を出る時庭
 の櫻よ書付一歌とぞ



此の
 奏
 都の花ふ
 おくまの娘ん
 庭はさくら木

保臣ハ筑後の国水田天神の
 祠官めと和泉守たり勤
 王の志氣めりとも深く父子兄
 弟よ國を脱て去りつよ
 皇室の恢復を議り伏水の義
 挙よも衆人服して渠と首領よ
 做んしをり既よ甲子の變動
 小も久坂と論を同しうせし
 くと遂よ禁門へ迫りよ
 至り事の破れよ及び一
 う天王山よて屠腹せり



真木保臣
 志の
 嶺の
 岩窟よ
 うらみり
 銭が年月は
 原海は海ひ

酒井へ土州の藩りて
 本名を大里吉とて
 勇猛りてとまざる義
 氣あり甲子の京亂よ
 同藩士千屋
 菊次郎等とてのふ長
 州の義徒と與て天
 玉山とて同盟十七士
 何れも同時は割腹せり
 六の歌ハ楠公の墓前よ
 拝して詠ありとて

山本ハ長州の人ありて報
 國の有志あり既に攘夷の
 勅旨よ遵ひ長州とて
 死力を尽しとて異船を
 撃拂ひて尚交易とて
 を怒り同志今井精一と
 諷り薩商大谷仲之進を
 防州別府浦とて斬害し
 首を浪花よ携へゆた
 おとを梟木よとて
 其側にて両士よ自殺せり



安藤ハ作州の人よし
 胆勇あも吏衆に超たり
 甲子の夏幕吏等京
 中の浪士を探るその時
 鐵馬客舎より捕手の
 既に向ふ及びゆくと
 飯を食し終り二人の
 捕手を斫殺し長州郎よ
 身と隠せり後京乱に從
 ぐひて堺町より奮戦し
 大砲より中りと斃る



小四郎ハ藤田東湖の
 三男みて水戸家の正
 義士あり慷慨の余り横
 濱を焼て攘夷の魁とる
 さんと計り有志の徒を
 かこらひて大平筑波の
 両山に楯籠り後武田
 伊賀守と合一討手と
 引受けく善く戦ひて
 北国よりよく勢ひきり
 まり武田と俱に死し就り



武田の耕雲齋と号し水戸烈
 公の愛臣ありて正義絶倫の
 英傑あり元治元年同藩の
 有志等筑波大平の槍籠り
 一帯之を鎮めんと周旋する
 奸徒等と讒訴せしむる
 是非なく筑波と合併し
 京師に登らんとしたる途
 中諸家の追兵を惱せしが
 遂に加州の軍門に降伏
 後同士等と俱に死せり



武田伊賀守

かきまの櫓
 袖の籠るみ
 おのひぞ
 城の志く雪

伊藤も同藩しつて
 め大平山に籠り後
 伊賀守の隊に加わり
 武田の奇計の指揮
 を受けくまなく討手と
 追ありぞけしが北国の
 雪もあやまて俱に降伏
 しく死し就り此人
 風雅の心ありくあま
 るる歌も陣中の日記の
 たりし書付ありとぞ



伊藤栄太郎

思ひか
 山
 海
 君の
 大

黒澤も同藩も
 武田より属し上州路へ
 発向し高崎の兵よ
 りしと大の戦
 功をあらわし夫より
 越前より趣きて雪中の
 苦戦なびくありしが
 吹雪の中を事しをも
 せむ奮勇の心とも目
 覚しうりしが後伊賀守
 と共よ死せり



赤城を野州蘆尾山大願
 寺の別當よ概世の志気
 あり既よ筑波の義徒よ加
 り所々の軍よ奮勇と
 後武田より属して北国よ
 赴く此よ武田等加州よ降
 りて歎願なさん事と議を
 赤城支の成らざるを説と
 衆よ用ひざるが故よ別
 是く京よ登らん途
 彦根の兵よ取囲まれ憤戦
 して遂よ死せり



福嶋ハ周防の徳山の藩
 勇剛の壮士あり
 明治元年正月 初旬 既よ
 徳川氏大軍を率ひ京
 師に入りの所へゆりて
 男也も官軍より加りて
 城州橋本より出張し
 渠が先鋒より破り入りて
 憤戦衆目を驚かせし
 が終よ重創を蒙りて
 死せり

毛利ハ薩州の藩より智
 勇もどく又それ官兵の
 一人あり 既よ鳥羽伏見兩
 道より 敵兵進み近づき
 猛勢のつとも熾んあるを
 強兵衛更よ物ともせむ
 さあがら 猛虎の如きなる
 ごとく奮戦よ及ぶ程よ遂よ
 強陣を破りし其の
 身も數箇所の瘡を負て
 凱陣の後歿したり



藤崎も薩州藩も
 その身怪輩ありと
 ども忠憤のたゞなる
 尚重臣めも劣るあ
 むく彼の伏見もその戦
 争も関東勢と抗戦
 へ更も一歩も退ごうぞ
 よく隊長の命もあが
 ひ大い敵を悩せしが
 遂も深痕を蒙りつと
 竹田村も戦死せり



富山もま薩藩も強
 勇無類ありのま力量も
 衆も超へたり既に官軍越
 後も入り長岡城を攻む
 と死身ひつる斥候も出たる
 長岡の伏兵も遇ひ暗も
 擒もせしと一く種々陳
 ぶれども听入む稍斬れんと
 するも及び忽ち繩と切
 つ敵の短刀を奪ひつと数
 人を刺す自殺せり



通禧朝臣ハ正四位下少
 將たり國事ヲ尽カセ
 られ一ガ文久三年八月
 十八日 朝議一變みせ
 一より嚴謹を被られ
 七卿のろとも長州よ
 趣かれ一は 大政復古の
 時よつろろ 外國事務
 總督とより 兵庫裁
 判を兼り此歌ハ長州
 みその詠ありとぞ

基修朝臣ハ修理権
 大夫たり固より正義を
 主張され一が彼十八日の
 變動より七卿長門よ
 赴く志をく 歎奏せし
 ろうち 錦小路頼徳卿
 ろへ彼地よ卒せらる
 然るは 明治元年より
 残る六卿 歸洛せし
 跡を復古の時来り
 壬生卿參與とありあふ

東之無通禧朝臣
 大君の大
 汝亦何
 我よ志をせよ

壬生基修朝臣
 吾の志を
 汝不知れを
 うりたるんた

諱を直候朝臣と称を
水戸烈公の第八子よ
一々武州河越の藩
主たり烈公の遺風を
守られん文久年間
總裁職たり一時専ら
正義を主張せしゆ
有志等大に欽慕
せしがあの侯職を辞
せらるゝと馳く甲子の
京乱を起りしを



河越少将

家隆の

屋敷の

おと

はる

はる

か

元純朝臣を長州清
末の藩主たり嚮よ長
州の人数を指揮し
堺町御門を警衛せし
率に免除せしり本
家の誠実を明さんと吉
川益田の両將と俱に屢
歎願せしりしを
られぬ是非なく七卿よ
供して帰國ゆりしが後
其正義露つてしを



毛利元純朝臣

玉如結を

を

を

を

を

を

み

安芳朝臣ハ勝武ノ一トテ
幕府ニ仕ヘ一頃ハ安房
守たり國事ニ尽カセ
且一吏ハ衆人ノ縷々知
る所アリ大政復古ノ後
官途ニ進マル

右ノ如クハ一百名ノ何
れモ正義誠忠ニテ遂ニ
旧弊を一洗シ文明開化
ノ今日ニ至リ尚ホ
編ニ漏タルハ異日後
集ニ撰ニ奉グニ

参議安芳朝臣



玉のふりかへし
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで
好馬のついで

明治七年九月十五日官許岩崎氏藏板

東京
書房

和泉屋市兵衛
藤岡屋慶次郎
森屋治兵衛
山口屋藤兵衛
和泉屋幸之介
辻岡屋文助發兌
彫師渡辺栄藏

